

## 世界的戦後レジームの枠外に出よう！！

注：レジーム=体制

新年おめでとうございます。

「年々歳々 花 相似たり、歳々年々 人 同じからず」の格言通り、私も皆様と共に旧年より、より向上した同志の一人になるよう努力致す所存です。本年も宜しく願い申し上げます。

さて、志雲会が今後活動する為には、現在の日本の姿、加えて世界の現状と未来を冷静に分析し、会の運動に資する必要があるでしょう。その為、塾長としての見解を述べ、同志の批評を頂ければ幸甚と思う訳であります。

### <戦後の日本とは>

戦前、戦中の見解は色々分かれるところであり、今回は避けます。「菊と刀」の著者ルース・ベネディクト —私には反論もあるが— 次の様に述べている。



ルース・ベネディクト

注) 菊と刀 (原題: The Chrysanthemum and the Sword)

ベネディクトは、日本を訪れたことはなかったが、日本に関する文献の熟読と日

系移民との交流を通じて、日本文化の解明を試みた。『菊と刀』はアメリカ文化人類学史上最初の日本文化論である。日本の文化を外的な批判を意識する「恥の文化」と決め付け、欧米の文化を内的な良心を意識する「罪の文化」と定義したことへの批判がある。ベネディクトは教え子たちに「『菊と刀』はあまり読まないように」と言ったとも伝えられる。

「あれ程、好戦的で特攻などという理解を絶する過激な攻撃まで仕掛けた日本がひとたび敗戦となると、借りてきた猫の如く全くおとなしく従順になって、占領政策に従うことが不思議だ」……と。

彼女にそう言わしめた原因はアメリカの日本に対する「戦後占領政策」に原因があったのである。この間GHQによる事実隠蔽によって、日本人の戦後の基礎がGHQによって作られたという根本的な事実が明らかにならぬよう、巧妙な政策が続けられた。特に彼等が腐心したのは、国民が軍部や政府による軍国主義的支配から、日本国民を開放する「解放軍」と思わせることだった。日本人の大多数が「占領軍＝解放軍」と信じさせられた。

注) GHQ

General Headquarter の略。連合国軍最高司令部、進駐軍とも言う。



厚木基地に降り立つ初代最高司令官ダグラス・マッカーサー

これが今も日本人の左派の人達が消え去らず持ち続けている「戦後意識」である。当時8月15日を終戦の日として、国民が「解放軍」によって軍国主義支配から解き放され、この日を日本人自身が契機として戦争を反省し、悔い改め、民主主義を求めた革命の日だと思わせるよう、彼等は演出したのである。

このようにアメリカによって日本の戦後は作られたという事実を隠蔽された。我々日本人は「主権」も「自主」も奪われ、「戦後」という大切な出発点さえも、我々は大きな「欺瞞」を抱え込まされたのである。8月15日は終戦を日本が認めた日であって、決して戦後が始まった日ではない。戦後はこれから7年後の、日本が「主権」「自主」を取り戻した1952年4月28日のサンフランシスコ講和条約によって、やっと戦後が始まったのである。この戦後の出発点がどこにあったかは、日本の今を知る為に最も大切なことであろう。1945年から1952年の間は端的にいうと、主権が奪われ連合軍によって戦後の基礎が作られた期間だったのである。主権なき国土は国家ではない、属国である。その間アメリカは日本から軍事力を根絶させることと、教育改革による民主化を実現させる為、種々の強権をもって日本という「危険」要素を全面的に「無」にする装置を作っていた。

#### 注) サンフランシスコ講和条約

第二次世界大戦におけるアメリカ合衆国をはじめとする連合諸国と日本との間の戦争状態を終結させるために締結された平和条約。この条約を批准した連合国は日本国の主権を承認した。

私は日本の戦後の基礎を作ったのはポツダム宣言の無条件降伏のトリックにあったのではと思っている。あの降伏文書は、「国家の無条件降伏は要求していない」日本国政府が軍隊の無条件降伏を宣言することを、日本国政府に要求するものであった。無条件降伏するのは軍隊である。全文を要訳すると次の如くなる。

「日本の軍国主義者たちが、日本国民を欺いて世界の制服を企むという過ちを犯し、自由や正義に基づく世界の秩序を破壊しようとした。そこで自由な人民が立ち上がった。彼等の力によってドイツの野蛮な行為は壊滅させられた。今や日本は自由と正義の前に敗北しつつある。日本の敗戦の後には、過誤を犯した戦争犯罪人である軍国主義者達は厳重に処罰され、日本から軍事力が完全に除去されなければならない。日本には新しい民主的な政府が打ち立てられなければならない。その為には、連合軍は日本の諸地点を占拠する」……と。

日本は「無条件降伏」の意味について、天皇制度という「国体」の護持を認めるものか否かを心配し、アメリカに問い合わせる。これに対し8月11日「バーンズ」より回答があり、「無条件降伏」について「軍隊の無条件降伏」であるとの回答ではあったが、回答の冒頭に「降伏時より天皇および、日本政府の国家統治の権限は……連合国最高司令官の制限の下に置かれるものとす」とある。これは外務省訳だが、「統治権はGHQ最高司令官によって『制限』される」というところが、原文では「subject to」なので「従属する」となる。バーンズ回答はアメリカの本意であり、主権を事実上最高司令官に移ることを示している。ポツダム宣言は公表される宣言であり、戦勝国が敗戦国を支配するという国際法違反故に「国家を占領する」との文章は書けなかったのであろう。

戦争に敗れようとも政府がある限り、近代国家の原則は守らねば……の良心が働いたのであろうか？ マッカーサーも「主権移行」によって日本を思いのまま変える為には必要だと考えていたのである。日本の政府はそれを「制限される」と訳し、主権が奪われることを知っていながら「主権」は日本にあり、少しでも制限されると誤魔化していたのである。

即ち7年間はアメリカの属国であり、アメリカは日本人の恥を知り、道徳を重んじる特性を巧妙に利用し、日本は「道徳的」に誤った戦争を起こした、故に天罰としてその結果敗れたという意識を持つよう、あらゆる手段を講じて植え付けた。軍事力で劣っただけでなく、反道義的な戦争をおこした、結果日本は敗北し、反省し、自ら民主主義を求めアメリカに保護を求めた如く見えるよう、思い込むよう洗脳したのである。アメリカが日本的伝統の文化、本来の日本精神というべきものを希釈又は破壊する為に「道義的」という「特効薬」を使用し、日本の主権が無い期間に、本来民族自ら作るべき憲法さえ押しつけられたのである。この「道義的な敗戦」という意識は、日本人の価値観・国家観をも変え、全てに対し劣等感と自虐感情を植え付けられることになる。何かにつけ「日本だけが悪いことをし、迷惑を掛けたから仕方が無いや」……の如き思いから、事実でない韓国や中国等の言いがかりに対しても只々頭を下げ謝るだけの国家になった。南京事件、慰安婦問題もこの線上に存在する。

ルース・ベネディクトの疑問に対し占領政策が原因であると述べた根拠は、以上の「道義的敗戦」という意識から生じたものである。我々はこの洗脳され誤った価値観や意識の間違いを多くの人に伝えるべきであらう。この歴史観によると、日本の戦後は1952年から始まったといえる。それ迄はアメリカの「道徳的な正義」による「不正への懲罰」というアメリカの占領政策の意味を強く刷り込まれた主権なき日本の7年であり、決して戦後ではない。「道徳的敗戦」とい

う価値観を徹底的に植え付けることが、アメリカの占領政策の大きな意味であった。

アメリカの日本属国意識は今も生きていて「年次改革要望書」という名目でアメリカの都合による内政干渉が行われている。その結果約70年、日本は大きなジレンマを抱えながら歩き続けてきた。民主主義と経済成長を近代世界の普遍的世界と信じる「アメリカの歴史観」と「伝統的日本精神の価値観」との軋轢と、平和憲法と謳いながら日米同盟を結び、米軍基地を置き、国の運命をアメリカに託す自己矛盾を背負って、苦渋の道を歩いている。

我々志雲会会員は、今後の日本の進むべき道や、世界の中での立つべき位置を熟考し、真の自立実現の為の志をもって社会に訴える草の根運動を進めていく必要がある。日本人の一人一人が「勝者＝善 敗者＝悪」の洗脳から一日も早く脱出することだ。歴史研究はその為にも必要なのだ。

## <価値観の対立の中で日本の進むべき道>

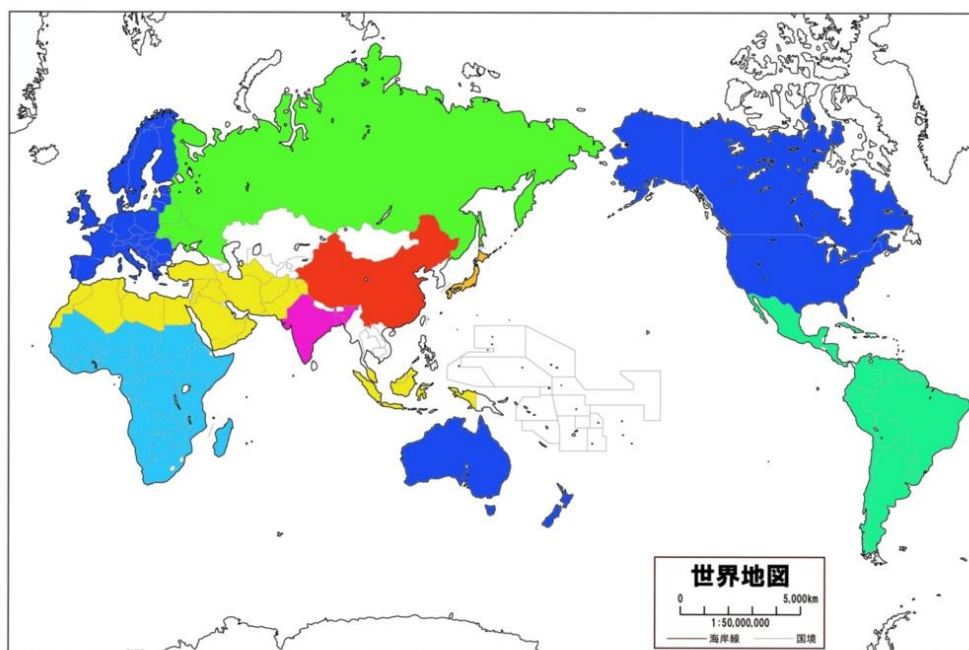
今、世界ではアメリカの自由・民主主義・人権思想・市場原理主義に価値観を持ち世界化することによって世界秩序が安定し、世界各国の人々が幸せになる……とのユダヤ・キリスト教的世界観がある。アメリカがこのメシア的使命を「幸福追求」の価値として様々な敵対者との闘争を経て、世界化し、このプロジェクトが完成した時、歴史は終わる……との論文「歴史の終り」をフクヤマが1989年に発表した。

注)「歴史の終り」

アメリカの政治経済学者フランシス・フクヤマの著作。国際社会において民主主義と自由経済が最終的に勝利し、それからは社会制度の発展が終結し、社会の平和と自由と安定を無期限に維持するという仮説である。民主政治が政治体制の最終形態であり、安定した政治体制が構築されるため、政治体制を破壊するほどの戦争やクーデターのような歴史的な大事件はもはや生じなくなる。そのため、この状況を「歴史の終り」と呼ぶ、とした。

彼が「最終戦争」と考えていたのは、社会主義という名をまとった全体主義との戦いを彼は想定していた。自由な民主主義や市場経済の勝利が確定し、歴史は終わると。しかし現在は、主権国家ではないテロ組織「アルカーイダ」や「イスラム国」の出現により、簡単にはいかない状態である。

一方、フクヤマの「歴史の終り」論に対抗して、1993年に政治学者のハンチントンが「文明の衝突」論を提唱した。彼は文明の区分けに於いて、日本を一國一文明とした人物でもある。ハンチントンは冷戦後の世界は決してフクヤマの言う、自由・民主主義・市場経済などの西洋からなる西洋的価値の不適化や世界化を意味するものではない。欧米からなる西洋文明とイスラム文明、中国文明などの複数の文明の衝突の時代という歴史観である。この二つの歴史観はハンチントンの図式の方が当たっているようである。この対立は十字軍の聖地奪還から、現在アルカーイダやイスラム国問題へと続いているので全く新しい歴史観ではない。大切なのは日本にとってこの歴史観の中で日本の立ち位置と未来の役目である。



#### ハンチントンによる文明区分

朱色 - 中華文明

ピンク - ヒンドゥー文明

黄土色 - イスラム文明

橙 - 日本文明

黄緑 - 東方正教会文明

青 - 西洋文明

若草色 - ラテンアメリカ文明

水色 - アフリカ文明

今、日本は、本来ハンチントンが区分した如く、西洋文明でもイスラム文明でも中国文明のいずれでもない。しかし現在日米同盟による、価値観の共有とそのレジームの一員としてある限り、将来イスラムとは対立するだろう。さて、そうなる戦後の最高の国是である「一国平和主義」は保たれない。そこで安倍首相は「積極的平和主義」を実行し、「一国平和主義」を根底から変えようとした。左派の「平和主義者」は国民を戦場に送るつもりかと反対しているが、これは「国際社会」の秩序を脅かす危険勢力（ならず者国家・国際法無視 テロ関係国家・集団）を積極的に排除し、国際秩序を守って行こうとするもので、「我、関せず」で逃げ回っているには無理な状況になっている。だがこの時点で大きな問題になるのは、交戦権を否定する「現憲法」である。

世界の秩序や平和は「力による秩序」即ち「アメリカの覇権」を想定するフクヤマの「歴史の終り」論となる。日米同盟も平和どころか戦争を招くという矛盾を日本は抱える事になる。今までの日本の安全は「一国平和主義」と「日米同盟」がセット、故に日本の安全は中国やロシアから守られてきた。今後の日本の平和も、混乱も又経済発展も、このグローバルな時代では、嫌でも世界と深く結びついてくる。平和も現状では戦闘を避けるという消極的なものではなく、それ自体「力」によって作り出すものになっている。「ボックス」というラテン語から出ている西欧等の「平和」は「力によって平定された状態」を意味している。しかしその「平和」は日本の求める真の平和を意味するものではない。

**日本の求める平和**は明治天皇・昭和天皇も歌でお示しなされた「四方の海 みな兄弟（はらから）と思う世に……」の意味するところの「平和」である。決して西欧の考える「国際平和」の形ではない。世界は今やイデオロギーではなく、各国の価値観で動いている。国際社会は各種各様に混在した国の集合体である。故にいずれも思想・宗教・文化・価値観が異なり、いずれの価値観も「普遍的原理」になることはあり得ない。またフクヤマの「歴史の終り」論のみが「普遍的原理」ではあるまい。世界では各国各様な世界観や歴史観を抱き信じて生きている。西洋が嘗て抱いた「上から目線」で、己の主義、主張、価値観を「絶対化した価値観」としての押し付けは、価値観の衝突による国際紛争を生むが故に止めるべきであろう。日本の価値観もアメリカと共有できる面も多々あるが、歴史観や文化は同じではない。今の日本は民主主義に於いても本当に信じ切っていない。占領期間、アメリカの価値観を受け入れないと戦後の日本は主権を取り戻せなくなる現実があった（今は半主権国家であると思うが）。我々も一国一文明という独特な文化を持っている。この独特の文化を取り戻さない限り、真の日本精神は生かされまい。日本は今迄アメリカ側の目で見えてきた事が多かった。今後

は日本の目でアメリカを、又国際社会を見る必要がある。

日本は今、安倍首相が唱える「戦後レジームからの脱却」とは、平和憲法プラス日米安保体制の国の安全に関わる基本構造のみならず、首相の考えるレジームとは、単に国の統治に於ける体制だけでなく、日本国内の失われた伝統的独自の価値観、思想様式、宗教的信条、生活習慣を含む「国のかたち」の変革を示していると私は理解している。他国によって、今迄作られ洗脳されたレジームを受け入れた半人前国家の価値観を首相は変えようとしているように思える。確かに今迄のグローバル化した世界では、経済にしる、防衛にしる「一国平和主義」では対処できない国際情勢である、そればかりではない、アメリカの歴史観、価値観の正当性の押し付けは中国の覇権主義や、北朝鮮・イスラム諸国との軋轢と争いと生み、又それがアメリカの歴史観、価値観の脅威となる、悪循環を生んでいる。

日本が西側の価値観の一員である限り、将来必ず他の歴史観・価値観と戦う一員として、争いに巻き込まれる運命にある。この危険性を避け、平和国家を望むならば、どこにも属さぬ日本独自の価値観とレジームを取り戻した日本が「お互いの価値観」を「認め合う」「寛容さを身に付け、己の価値観を押しつけぬことこそ」、平和な国際社会を作れる「唯一の道」であるとの新しい価値観の主張を説けるはずだと信ずる。何故なら、日本はアジアや他の植民地に、自ら立ちあがる自主自立の精神を説き、その為に白人諸国家を相手に「戦いそして敗れた勇氣ある唯一の国だから」である。現在は諸国家の利益の対立の問題ではなく、西欧啓蒙主義が結果的に生み出した各文明の価値観の対立が、紛争を生んでいる。

日本の野党も、真の日本の平和を願うなら、明治維新の如く国家の為、世界平和の為、一致団結して「世界的な戦後レジーム」の枠の外に出る勇氣と気概で新しいレジームを世界に訴えるべきである。その為には、まず今の憲法を変えることがなすべき第一歩であろうに！！しかし日本は戦後、平和主義と民主主義を車の両輪として、民主主義＝平和主義と考えていた。民主主義のアメリカを考えても、戦争放棄などしていない。故に両主義はイコールではない。日本の平和と西欧の平和は「平和」の意味が異なる。

西欧の平和には必ず「武力」が伴う、故に民主主義と平和主義は別ものである。また民主主義では主権者が国民の生命・財産を守る義務がある。日本は、主権者は国民である。主権者の国民の「誰が守るのか」もまた、集団的自衛権に於いても「誰が国を守るのか」という原則論は確認されてはいない。現状では国を守る



のは、国民ではなくアメリカといういびつな欺瞞に覆われた国の在りように危惧を感じる。他の民主主義国家は、様々な兵役制度で国を守っている。

- 1) 国民皆兵制度の国 - スイス、トルコ、イスラエルなど
- 2) 徴兵制度の国 - 韓国、台湾、シンガポール、タイ、エジプトなど
- 3) 志願制度の国 - アメリカ、イギリスなど

今の日本では、「祖国を守る覚悟」と「先人達が命をかけて我々に伝えてくれた日本伝統の自己犠牲の精神」だけは引き継がせねばならない。でなければ、他国からの信用・信頼も日本が「国際社会の理想像」を説き、訴えることも叶うまい。この様な理想像を持たなければ、日本は繁栄の中で墮落の道をたどるに違いない。

未だ日本の国内に於いては、「護憲と集団的自衛権に反対する人達」も居る。護憲を唱える人たちに於いても、改憲の人達に於いても、保守系の人達に於いても、戦争の惨禍を再び繰り返さない思いは同じであろう！！左翼の人達は、保守系の人達を戦争崇拜者の如く宣伝しているが、大きな間違いである。未来の平和な「日本国のかたち」や「国際社会のかたち」を作ろうとする志は同じであろう。左翼系の人達はどの様な未来像を描き、現在の思想の中で平和実現を図っておられるのか、私は知り得ない。

だがこれだけは言っておきたい。今の民主主義を奉じるレジームの一員である限り、必ず民主主義以外の価値観を持っている（例えば、イスラムの価値観）国々と衝突し、悪くすれば戦いに巻き込まれる。又日本が中国的価値観を持つ国の一員になりそのレジームの中に巻き込まれても、未来には必ず他の価値観を持つ国々と衝突する恐れがある。私達日本は幸いにして他のレジームと異なった価値観を持った国である。この一国一文明の特性を世界平和の為に、他のレジームから独立すべきであろう。

独特の価値観、即ち天皇を中心とした重徳な価値観と新しい自らのレジームを築き上げることこそ「戦いの無い平和日本」を創造する要因である。何故なら他のレジームに属した日本の主張には、他の価値観を持った国々は聞く耳を持つまい。必ず何らかの「もくろみ」を持っているのではと「疑惑」の目で見得であろう。

日本独特の「四方の海 皆兄弟（はらから）と思う世に なぜ波風の立ちさわ

ぐらむ」という、皇紀2678年の伝統ある国の平和思想から発する国際平和への提言には耳を傾けてくれるはずである。故にアメリカから与えられた戦後レジームから脱出し、真の主権国としての立場を築き、国際社会に向けて、声を発する必要がある。その為に一番必要なのは、憲法を自分の意志で改めることであろう。

日本は先ずアジアの各国が頼れるような「正義」と「強さ」を持った平和国家に成る事である。！！

平成30年 1月28日

志雲会代表 有馬正能